

いしづち

2021.11

NOVEMBER

No.143



公益社団法人 愛媛県建築士会

Ehime Society of Architects & Building Engineers

<http://www.ehime-shikai.com>



世界建築紀行 地球裏側の寄り道 ナスカの地上絵とイグアスの滝散策
寄稿 ポーランド紀行
けんちくの輪

1	世界建築紀行	地球裏側の寄り道 ナスカの地上絵とイグアスの滝散策	西予支部 松山 清..... ①
2	寄稿	ポーランド紀行	四国中央支部 尾藤 淳一..... ①
3	けんちくの輪	ふりかえりとこれから 趣味が高じて仕事になりました。	松山支部 和泉 秀弥..... ① 松山支部 河合 優志..... ②
4	お知らせ	第3回理事会概要報告	事務局..... ③

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



水彩画

のしま
題：「能島」

[表紙画について]

瀬戸内海のはほぼ中央に位置し、中世、村上水軍の一派、能島水軍(野島氏)が水軍城を設けた。この付近の海域は帆船時代、瀬戸内海航路の最も重要な航路の一つであった。戦国末期、村上氏は豊臣秀吉との戦いに参戦したが敗北を喫し、1588年に秀吉の海賊禁止令により、水軍の歴史は終わりを告げた。江戸時代以降無人島となったため、その城塞遺構はよく保存されている。1953年能島城跡の名称で国の史跡となり、2017年能島城が続日本の城100名城(178番)に選定された。(ウィキペディアより)

表紙作者 上田 勇一 プロフィール

- 1974 東京生まれ
- 1980 小学校から高校まで松山在住
- 1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞
- 1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞(愛媛県建築士事務所協会主催)
- 1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ
- 1996 日本工業大学建築学科 卒業
- 1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催
- 2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」(新潮社)の装丁担当
- 2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞(東京/日動画廊)
- 2010 愛媛県美術館に作品「ドライフラワー」收藏される
- 2015~17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載
絵画教室やオリジナルブランド額工房「糊りチエルカ」を設立
- 2017 「えひめの塗り絵」を出版
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。
現在、現代日本美術会 会員/審査員

地球裏側の寄り道 ナスカの地上絵とイグアスの滝散策

西予支部 松山 清

1 最初で最後の、地球の最果て



▲ イグアスの滝（アルゼンチン側）

日本から見て東方はアメリカ、西の果てはユーラシア大陸最西端であるポルトガルのロカ岬、というのはメルカトル図法の地図での話ですが、“地球の最果て”と言うとアフリカ最南端のケープタウンか南米のアルゼンチン辺りかなあ、と私は思います。南アフリカへは日本からの直行便がないため北京や香港、シンガポールで乗継いで行けますが、南米はアメリカまで行かないと乗継便がありません。日本から遙か彼方という意味で、“地球の裏側”は南米のアルゼンチン辺りか、という感じがして、自分の中ではイグアスの滝が地球の裏側だとしました。

マチュピチュを訪ねるので、もう二度と来るチャンスはないだろうと、ナスカとイグアスへ寄り道をして、地球の裏側に足跡を残し、自分の目で確かめました。ペルーの首都リマを起点として、ナスカは日帰りで往復でき、イグアスは2泊3日の旅でした。



“素晴らしい世界旅行”という番組が子供の頃ありましたが、ナスカって遙か彼方の遠い所、という印象ばかりで、そこへ行こうとは考えてもみませんでした。



▲ 谷に囲まれた平原に描かれた「ハチドリ」

2 ナスカの地上絵

ナスカはペルーの首都リマから約430km程南にあり、そこを日帰りします。リマからバスでピスコという町まで走り、ピスコ空港からナスカまではセスナで往復しました。



▲ 砂漠に疎らに建つ農家

▲ トウクトウク

リマのホテルで午前3時にモーニングコール。そして、朝食を摂って出発しました。バスでリマ市内を出て南下するとすぐに荒涼とした砂漠地帯が続きます。所々に建物はありますが転々と農家がある風景が延々と続き、途中GSとコンビニを兼ねたドライブインで休憩。そこには客待ちをするトウクトウクがいて、アジアの町と同じような雰囲気も感じます。



▲ 新しいピスコ空港

▲ 未使用のカウンター

その後もバスは殆ど荒野のパンアメリカンハイウェイを南下し、ピスコに到着。ピスコ空港はリマ空港よりもターミナルビルが立派で、搭乗受付カウンターも24カ所あります。ターミナルもピカピカでしたが、現在の就航路線はナスカの地上絵観光のみ。何とも寂しい雰囲気、殺風景なターミナルですが、ちょっと前までは掘っ立て小屋のような所だったそう。未使用のためカウンターにはビニールが掛かっていました。ピスコからナスカまで約200km程。



▲ ナスカ観光用セスナ

▲ セスナ内部

ナスカへ向かうセスナは乗客12人とパイロット2人の14人乗り。旅客機と比べて振動もあり、乗り心地はあまりよいとは言えません。まず、体重測定をしてバランスを考え座席位置が決まります。ナスカの地上絵は期待程大きくなく、また見る人によって個人差がありはっきりと見えないことも多い、と説明がありました。

ピスコ空港から西海岸に沿って30分程セスナで南下してやっとナスカ地方へたどり着きます。そこまでの風景はほとんどが砂漠。セスナは木の全く生えてない広い荒野の上空を飛び、たまに農地や村が目に入ります。灌漑設備が整っている一部エリアのみが畑となっていて長方形の緑が見えます。砂漠の中の白い線は、農業用施設の建物でした。



▲ 砂漠の緑化された農地

▲ 白い線のような構造物

出発した時リマは曇りだったので、ナスカの地上絵が見えるかどうか心配でしたが、ナスカに近づくに連れて、天気は回復していきました。

ナスカの平原には地上絵が30個程描かれています。それ以外に長い直線や車のタイヤの跡などがたくさんあって、地上絵がすぐに見分けられるとは限りません。

地上絵はセスナが機体をほぼ90°傾けて見るため、一方の窓からしか見えません。そのため機体は大き



▲ 乾燥したナスカ平原の水流の痕跡

く繰り返し何度も振れ、同じ所を行ったり来たりして、飛行機酔いをしてしまいます。地上絵はほぼ見ることができ、海岸から80km離れた乾燥地帯のナスカ文化は、星座や天体と関連して占いのためにこの絵を残したという説が有力な気がしてきました。



▲ ミラドル展望台とトカゲ(上)、海藻(左)、手(下)の絵

セスナを利用しない場合、この道路沿いの観察檣「ミラドル」から3つの地上絵を見ることが出来ます。上部に横たわる「トカゲ」はパンアメリカンハイウェイが胴体を分断していて、残酷。今では世界遺産ですがハイウェイ建設当時の20世紀前半は、地上絵の価値が認められていなかった証です。



▲ 最初に見つけた地上絵、斜面の「宇宙人」



◀ 「オウム」

「サギ」▼



▲ 「トンボ」と言われる地上絵

ナスカの地上絵をアクロバットのようなフライトで30分程見て感動に浸った後、ナスカには降りることなく出発地のピスコ空港に帰りました。

③ ウユニ塩湖を越えてイグアスの滝探検



▲ 悪魔の喉笛 (左側：ブラジル、右側：アルゼンチン)



▲ 大迫力の悪魔の喉笛落口

イグアスの滝はイグアス川がパラナ川と合流する一帯に位置し、アルゼンチン、ブラジル、パラグアイの3カ国の国境地帯にあります。

平成28年10月30日、リマ空港の出国審査を受けて30番搭乗口まで行くと、日本からの団体が5グループいてビックリ。80人程の日本人でしたが、それ程ペルー・イグアスコースは人気があります。世界旅行の最後に来た人や百カ国目の記念、という方もいました。

ウユニ塩湖は、空から見るととてつもない広い、真っ白な平原です。しばらく南東のイグアス方向へ飛んでいくと、はじめに見えた所よりも何倍も広く塩湖が延々と続きました。イグアスまでの移動で丸一日を要しました。

10月31日、これから2日をかけてイグアスの滝を探検。アルゼンチン側とブラジル側から観光します。いずれも2時間以上の長い歩行距離で、体力が必要です。

まずアルゼンチン側ではトロッコ列車でイグアス国立公園のジャングルを抜け、「悪魔の喉笛」へ行く遊歩道の入口、ガルガンダ・デル・ディアブロ駅を目指します。



▲ 飛行機から見たウユニ塩湖

リマからイグアスまでの飛行時間は約4時間。砂漠地帯の南米西海岸から、亜熱帯湿潤気候のブラジルイグアスへいよいよ足を踏み入れます。



▲ アルゼンチン側のトロッコ



トロッコを降りるとイグアス川にかかる遊歩道の橋を渡り、悪魔の喉笛展望台まで約1km歩いて行きました。世界一の滝の大迫力を味わいます。展望台ではイワツバメが飛び交っていました。



▲ 悪魔の喉笛へのブリッジ



▲ 悪魔の喉笛展望台（左）



▲ 悪魔の喉笛下流

悪魔の喉笛を見た後、再びトロッコで途中駅まで引き返し、ボートツアーで滝壺のクルーズ体験をしました。水量の多い滝の中にボートで突入したのですが、体の穴という穴からイグアス川の水が浸入してくるほどの水圧を受けました。登山用の雨具を着ていても、下から水が強い圧力で入ってきます。ビニール袋に包んでいたデジカメも使用不能となりました。滝の水圧は想像を絶するものです。その後は三国展望台に立寄り、ヘリの遊覧飛行に向いました。



◀ 滝へ行くジェットボート



▲ アルゼンチン側の大きな滝にボートで突入



▲ 三国展望台

三国展望台は、アルゼンチン・ブラジル・パラグアイのそれぞれの領土に設置されていて、国旗の色が塗られています。

三国国境展望台の後、ヘリコプターでイグアスの滝を遊覧飛行します。ヘリポートはホテルの直ぐ近くで、6人乗りのヘリで約15分間の空の旅。上空からだとなかの全貌が見えるため、乗った人はみんな感動していました。

フライトは翌日の予定でしたが、雨の予報が出たため急遽一日前倒して実施。一日でドロッコ、ボート、ヘリと3つのアクティビティでしたがとてもスムーズで、早めに終了したので、ホテルの周辺も散策することができました。



▲ ジャングル上流のイグアス川
◀ 滝をヘリで遊覧飛行



▲ ブラジル側に建つホテルとそれを取り囲む滝

翌日、このホテルからブラジル側の散策が始まりました。ブラジル側の遊歩道は、イグアス川を見ながら右岸を悪魔の喉笛展望台まで歩きます。ブラジル側からは悪魔の喉笛を見上げるようなレベルに展望台があります。滝が2段に落ちていて、途中の真ん中レベルに遊歩道が設置されています。日本ではちょっと考えられないようなアクロバティックな歩道でした。

▼ 悪魔の喉笛下流

▼ ブラジル側の展望台



▲ ブラジル側の中段に付けられた遊歩道

4 太古と大自然の地球の裏側

日本から遙か彼方の地球の裏側へ行って、ダイナミックな地球を体感したような気がしました。地球の裏側はこうなっていたのかと自分なりに理解することができました。

ナスカの地上絵は空からセスナやヘリで見てその素晴らしさと意味を知ることが出来ましたが、ナスカは観光開発されておらず地上絵しかない。何も無い、素朴な世界でした。セスナの洗礼を受けた気分で、ナスカ地方は日帰りで行けますが、とても遠い世界でした。

イグアスの滝は多面的な見所と魅力のある、衝撃的大自然と言えます。日本の「華厳の滝」のように見るだけしか楽しみ方がないのとは対照的で、落口の間近に迫る展望台やスピードボートで滝への突入、ジャングルのロングトレッキングやヘリ遊覧などが充実していて、世界中からやってくる観光客をビッグな大自然が飲み込んでしまいます。

かつてここを訪れた元ルーズベルト大統領夫人が「可哀想な私のナイアガラ」と呟いたエピソードが有名ですが、それがすべてを語っていました。

ポーランド紀行

POLSKIE PODRÓŻE

四国中央支部

尾藤 淳一

本来、人の生活に役立つものであるべき建造物が、人々を苦しめたり、自由や生命を奪ったりするための物であってはならない。しかしながら世の中には、意図せずしてそうなってしまったものや、最初からそのために造られたものが、多く存在するのが現実である。

1

探求

子供のころ洋画好きの父親に付き合っただけでテレビの洋画劇場をよく見た。アクション映画の007シリーズなどは大好きだった。それとは別に、超大作といわれるチャールトン・ヘストンのベンハーやスティーブ・マックイーンの大脱走は何度も見た。ベンハーは紀元前後のイスラエル地区の話で、ローマ帝国の迫害に抵抗するユダヤ人の物語。大脱走は、第2次世界大戦下においてナチスドイツが支配下に置いたポーランドに脱走不可能な捕虜収容所を作り、英国を中心とした連合軍の捕虜を収容した。その捕虜たちが、決死の覚悟で脱走を決行する物語。二つの映画に関連性はないが、同じポーランドで、大虐殺されたアウシュビッツの歴史があり、ユダヤとナチスドイツそしてポーランドが、探求してみなくてはならない事項として、私の中にあった。2019年、ポーランドの経済・産業視察に誘われ、アウシュビッツ収容所の視察も含まれていたため、参加することに決めた。

2

旅

ポーランドへの旅は8月日本を出国し、ミュンヘンを経由してポーランドの首都ワルシャワに着いた。ポーランドはヨーロッパの中では東に位置していてロシアからの影響もあるが、EU 圏域ということで経済的には圧倒的にドイツから影響を受けている。ドイツとポーランドは隣国同士で、特に高い山や深い川や谷がないので、第2次大戦時にはあっという間に首都ワルシャワにドイツ軍が進撃してきて、街は壊滅状態になったという。今では近代的な街に生まれ変わっている。

ワルシャワから近代的な列車に乗り2時間30分ほどで、クラクフという街に着いた。ここは、ワルシャワに遷都する前には首都だった街で、中世のヨーロッパを思わせるヴァヴェル城や旧市街がそのまま残る美しい街だった。遷都がなされなかったら、この街が壊滅していたかと思うとぞっとする。しかし、だからと言って結果が良かった訳ではなく、そもそも戦争などないに越したことはない。

1. ワルシャワ駅に隣接する時計塔
2. ヴァヴェル城
- 3・4. クラクフ旧市街地



3

建築物

クラフクからバスで1時間30分程揺られて、オシフィエンチム（ドイツ名：アウシュビッツ）強制収容所に着いた。アウシュビッツ強制収容所は、もともとはポーランド軍の軍事施設だったのをナチスドイツが収容し、ユダヤ人強制収容施設としたものだ。従ってレンガ造りのそれは、宿舍か学び舎のように見える。しかし有名なガス室や焼却場、絞首台の存在が、それらを打ち消している。ナチスドイツは、結局110万人のユダヤ人を殺害したとされるが、ピーク時には14万人を収容していた。当然収容施設が足りなくなり、ビルケナウ・アウシュビッツ第2収容所が建設される。こちらの施設は、ドイツ敗戦時(人道的に非難されるとして)に、ほとんどが破壊された。残されたのはごく一部であるが、残された施設を見てもとても人道的であるとは言えないものであった。破壊された施設は、どんなに非人道的だったのか想像できない。施設に収容されることなく、ガス室行きとなったユダヤ人もいたという話や本当にユダヤ人かどうか検証していたかも怪しいなど、耳をふさぎたくなる話もガイドから聞いた。ちなみに日本人ガイドの中谷さんという方が有名で、Youtubeで見ることが出来るので、一度見てほしい。

- 1・2・3. アウシュビッツ収容所
- 4. 日本人ガイド中谷さん
- 5. ガス室外観
- 6. ガス室内観
- 7. 焼却室





1



2



3



4



5



6



7



8



9

4

歴史

ビルケナウ・アウシュビッツ第2収容所には、鉄道の専用線が引き込まれ、線路はそこで終わっている。当時使われたであろう輸送列車の展示があり、その列車で運ばれた人々の人生が、そこで終わったことを暗示しているようだった。

アウシュビッツには、ユダヤ人たちが着ていた服や靴、ユダヤ人の遺髪などの展示があり、ナチスドイツがしたこととはいえ、同じ人類が犯した過ちの記憶がある。美しいクラフクの市街地も、貴族が人民から搾取して出来たものかもしれない。そう考えると歴史的な建造物が、多くの人の犠牲の上のできた遺産ともいえるのではないか。我々建築を生業とするものは、歴史的建造物に対して、芸術的な価値を認めながら、その裏に隠された歴史について、畏敬の念を忘れてはならないと思う。

1. ビルケナウ第2収容所
2. 専用線
3. 輸送列車
4. 5・6ユダヤ人の衣服等
7. 収容施設外観
8. 収容施設内観
9. 冬場は、氷点下10℃位まで下がる

ふりかえりとこれから

松山支部 和泉 秀弥

赤根会長よりバトンを受け取りました、松山支部の和泉です。

私が建築へ進むきっかけをふりかえてみると、幼少期の頃から建築業を自営している父の影響が大きいと思います。施工を主に行っていましたが、図面を書くのが得意で、夜遅くまでドラフターに向かっていたのを思い出します。当時から建築士の資格も取得しており現在も士会員です。

そんな環境の中、小中学校の頃から家業の手伝いをしていました。高校時代は、趣味で行っていたアマチュア無線で親しくさせて頂いていた方の電気水道業へアルバイトで通っていました。今思うと、このアルバイト経験はあらゆることを体験させていただき、大人になって繋がってきたのですが、設備全般の知識の理解に大きく貢献していると思います。

その後は関西で学校を卒業したのち、商業施設、分譲マンションを主とする現場施工管理の仕事で7年ほどしておりましたが、勤めていた会社の事業縮小により帰郷しました。

帰郷したのが平成11年で、同年には無事1級建築士を取得することができました。建築士会への入会は実家の管轄支部である宇和島支部へ平成12年に入会させていただきました。その後、勤務地の松山支部へ移籍し現在に至ります。



松山支部中央地区(ワークショップ モザイクタイルコースター)

日頃の暇つぶしなのか趣味なのか？わかりませんが、物を作ることが好きで、数年前に自宅のガレージに目隠しウッドフェンスを制作しました。高さは2.3m程あり自立が必要。北西方向からの風が強く耐久性が必要ということで支柱は足場の単管、根回り基礎は重力式擁壁へケミカルアンカーと配筋基礎で緊結。基礎コンクリートはセメント、砂、碎石を手練りで打設。水セメント比、砂の湿り具合で全然変わるので難しいですね。フェンス材はレッドシダーにキシラデコールを塗布。子供にも手伝ってもらいました。



最後に、先にも記述しましたが、収まる気配のないコロナ禍の中、今後できることを模索するうえで必要不可欠なのはITC技術の活用と思っています。いろいろな情報を収集して活用できる部分から少しずつでも取り組み、建築士会の活動でも生かしていきたいと思っています。

次回は入会当時から大変お世話になっています、宇和島支部の石川淳さんへバトンを繋ぎます。よろしくお願いいたします。



松山支部 道後地区・中央地区合同イベント(お城下ウォーキング)

さて、2020年から続くコロナ禍は、今後どのような状況になるのかまだ見えてこない状況です。建築士会の活動も、全国大会の中止や、例年行われている行事も中止せざるを得ない状況です。私が所属している松山支部でも各地区で企画されているイベント等も出来ない状況で非常に残念に思います。

趣味が高じて仕事になりました。

松山支部 河合 優志

渡邊道彦さんよりバトンを受け取りました河合と申します。2010年に東温市で設計事務所を開設した際に建築士会松山支部に入会させていただきました。入会当初より渡邊さんには何かと親切にさせて頂いており、感謝と共に尊敬しています。正直、今回のバトンはかなり戸惑いでしたが、渡邊さんからのバトンという事で腹をくくりました。とは言うものの、最近は活動にもほとんど参加できていないものですから、きわめて個人的な事ですが、私が今の仕事を選んだエピソードを綴らせていただきます。

自分が建築の仕事に興味を抱いたきっかけとは？この事を考えた場合、私の場合は小学生の時に近所のプラモ屋さんで買った松山城のプラモデル、絶対これに間違いない気がします。逆にこれに出会わなければ建築の仕事はしていないと思います。

小学生の低学年くらいからプラモデルが好きでした。今でもプラモデルはかなり好きで、子供の頃よりエスカレートしていると思います。初めて買ったプラモは当時の子供に大人気だった「勇者ライディーン」でした。ゴッドバード形態(!)に変形できるやつ.....。

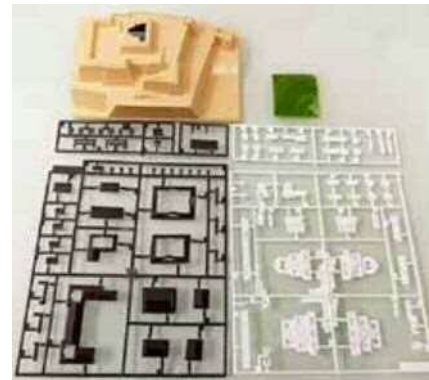
それが何かの拍子に、童友社というメーカーの「日本の名城シリーズ」の松山城を買いました。それまでキャラモデルばかりでしたが、奇しくも初めてのスケールモデルがこれでした。小学生が何故か城のプラモに食いついた訳ですが、普段何気なく目にしていて地元の城がキット化されている事に好奇心をそそられた記憶があります。結構、ツボにはまってしまっていて、名城シリーズの大



箱絵は当時とほぼ同じです

抵のモデルは組み立てたと思います。童友社の「日本の名城シリーズ」は今でも普通に販売されていて簡単に購入する事ができます。今回懐かしくて買ってしまいました。プラモ業界では金型を複数製作するのは縁起が悪いとされているので、何十年間もロートル金型を使いまわしているのですが、ランナー成型の状態も良好で、スケールモデルとしての完成度も、現代の目線でみても及第点のレベルだと思います。プラモの金型というのは非常に高価で、今の時代

だとランナー1枚あたり300~500万円が相場で、所有しているだけで固定資産税が掛かるし、定期的なメンテナンスが必要です。ランナー数が30枚以上あるような最近のガンプラなんかは一つのキットに億単位の開発費を掛けている訳です。



石垣の金型はかなり高価だと思います

話が脱線しましたが、色んな名城を組み立てていく中、千鳥破風とか下見板とか、火灯窓とか子供には到底読み方も意味も全く分からない専門用語を目にしていた訳です。そんな子供でしたから、気が付いたら高校は建築科へ進んでいました。当時はIT前夜で情報系の学科が一番人気、建築科が一番不人気でした。卒業後の就職先も非常に厳しかった時代で、クラスの半数上は畑違いの業界へ就職していましたが、私は幸いにも建築業界へ身を置く事になりました。子供の頃からの趣味が高じて仕事になってしまった感じです。自分のやりたい事が何なのか分からない人が多い現代社会において、自分は幸福なのだろうなと思います。これからも周囲の皆様への感謝の気持ちを忘れずに精進してまいります。最後までお付き合い下さり、有難うございました。

次回は松山支部、石村隆司さんにバトンタッチさせていただきます。石村さん、宜しくお願いします。



ジャンルのこだわりはあまり無いです